特別
ヘ4
8067

へ4
8067

<95-252>

古今和歌集灌頂口傳上

古今集ハ習事おほしといへとも七箇ハ大事十箇大事　五種ハ人麿を大事にするなり

一 七箇乃大事といふはけうしあなおほせとりとそもしまりし時より出来まりしといふ

いさなきいさなみ乃尊此国に流くたりし

始く天乃浮橋しあまふそよみ給ふこ

いさなきの尊乃御哥　ゆふ乃さいせうのんちん志う哥也

善哉遇可美少女

いさなみ乃みことの御うた

善哉遇可美少男

是をあまのうき橋の下にて女神男神となり給へ夫婦のちきりといふなり

一 万葉集人麿乃うた

天命呂命而大八十河彼此真見始細楽来

あまのうけとは　伊弉諾ノ尊也

いさなみとは　伊弉冊ノ尊也

大八十とは　日本国といふ事也

日本紀にハいろ〳〵くみしのまくらことはし給
歌とそ云にしその伝録也阿子根乃備なり
あこねとハ世満世神代にあめ乃うしき備なる
らねともいてあくさ芸申史婦みしのまくらい
ゆらハ男女のあひたをいふなり

一 歌二首このあめわかひこハ下てる姫のよミ給ふまするとハ

阿妹那流夜(アメナルヤ)　乙多那波多廼(オトタナハタノ)
宇那迦勢流(ウナカセル)　多磨廼弥須磨流(タマノミスマル)
廼阿那多磨波夜弥(ノアナタマハヤミ)　多尓輔多和(タニフタワ)
多羅須阿地(タラスアチ)　須岐多迦彦祢(スキタカヒコネ)

此うたハあめわかひこの喪に高彦根夫まゐりて花なま
きしかハ高彦乃きたりてしに輪田ねかれそのかたち
かくれ給ひし彦の時にそのてる姫見顕(モカリ)し
喪をを惜みつゝ天へあかりて喪屋をたて
給ひもかりし給ふ姫のせうと味耜(アヂスキ)高
高彦根乃妹とこれハ給ひしく天へ行
かれそのことをうらミしく二れならこの君うつゆ
給ひたるを下照姫はれハ彦根剣をぬきて

弄のまゝ給ふ　天上に行る也
阿妹那韋那とハ
乙多那波多とハ　猶狗乃祢ノ事之
花給へるにより天人着也、玉の見にもまきまとハ
玉をまめく手る椅なれとも　あなるゝ　玉たわゝ
とハ玉のひかりハ也となり　足をあらすきれ祢乃
身の光也　昔ふさ己あし江とハ昔のありこまゐ
光ささる代ハふなりあらせ給の祢たりうこさ
おりひしらハ足を味祢れ光をしまめ給へる

云なりうくヱハ哀傷れ人せんさまさし祢代
乃奇の有しひたなり
一　翁三千世界破祢代にまちのやうことハ本挾
円義をヱハ始まちも実れ義をいふにハ祢代
のうよ代ハふ一切乃祢ハ母れ胎内より生
給ふ毛手沈生まゝ胎内よハ八葉れ白蓮花あり
その花ハ十身ニ味具百界千如世界として利千
衆生のくさま也ハ一切衆生の生まゝし時ハ代千世界乃
蓮花を破りて生る故に千世界破としいふなり

帰命本覚心法身常住妙法心蓮本来具足
三身法三十七尊心住様　此文を見るに同く花生
乃心中より蓮花あらはしたり
一 第四六義口傳之事別にそれに書
一 第五天之岩戸之事
あまの岩戸といてはまことにあるまじき実の義をハ
くしきなる事あり口傳有いつく大和国にて香覗
山比中に岩屋ありにとらこもり給ひとて岩戸
といふ也　扨あり天乃香久山の赤金を取て鏡を鋳

天の香児山乃真榊を根こしにしてあまたして書
鰹を持て岩戸の前に立て八万の神達神楽を催る
事をうたひて神楽おこなはれ出給ふ事を申せ
伊勢物語にハ天皇をハ神武天皇と申又ハ平城
天皇とも申也　住吉の松と云ふ事も侍にかハ
け義にしるす
一 第七長柄乃橋も作るといふ事
長柄の橋とハ日本の橋の始にてよくもあるまし
みまかりて朽ちる人なし　摂津国なからの里に

はしらは浮まる橋となりて又道は渡りの水ハ
淀しうなりしに今ハ定て其比まで
めでたくハ摂津国長柄橋と云所に猶定人ありしかに
是之うらにさりハ故国ハ道を往古に絶て此
橋の古木を取て細く和して紙ニ為一足橋
云今ハ備乃前に渡る大坂橋なり其の辰ハ摂津の
長柄の里あり此渡りし時人柱をたて
為りしまれ共けれともあり名れハ神に祈りけれハ
大坂にまるさせし由従宮にわたしになりて大坂に

まうして供養の為に結縁によりて橋
渡の時も江口の長者いろいろにて多くの物を送り
橋渡乃もんいひしとて結縁する也

一 十箇之大事

第一 国常立尊之事（クニトコタチノミコト）
天地いまだひらけざる時ハさながら混沌（コントン）となりけ
そのうちに鶏卵子（ニハトリノカイコ）のごとし二にわかれてすめる
ハ天と成にごるハ地と成その中に化し同ニ立り
是木火土金水しとく付足て化の為に満て

形なし故に貴神と名付爰に五行自然に
和合し一神と成時わかちも是国常立尊
と名付又是はわかちも土中には葦牙(ヨシカイ)のことし
云くたゝの手足出来して人のかたちに似たるを
国狭槌尊(クニサツチノミコト)とおつく又人の五体それよりて眼耳
鼻舌身意六根しわかれしを豊斟渟(トヨクンヌ)
尊と名付木火土金水ハ陰陽ノ二ナリ木火
土ハ陽なり金水ハ二ハ陰ナリ故に一神二神とわかれ別
く四代の神より後男女わかるゝゆへなり

男女のわかちもなく是迄四代五代まてハ
八歳ほとわかちの振舞もなし海さとりし
ものなり
第七伊弉諾伊弉冊ノ尊より次第に其混沌(コントン)
剖判(ホウハク)して男女の振舞ありけり

地神五代

第一 天照大神(てんしやうたいじん)
第二 天忍穂耳尊(アメノヲシホミミ)
第三 彦火々瓊杵尊(ヒコホホニニキノ)

五帝
代四百廿二年

彦火火出見尊　殷代百九九年
鸕鷀草葺不合尊　周代初マテ
一百七十九万二千四百七十六年　十月

天神地神国々所領事

海原彦宮　国常立尊廟　日向国坐
八天部宮　国狭槌尊ノ廟　日向国坐
鳥海山宮　豊斟渟尊廟　出羽国坐
志貴国下宮　沙土煑尊廟　河内国坐
志貴千宮　沙土履尊廟　大和国坐

牛鼻宮　大戸間邊ノ廟　長門国坐
山邊ノ宮　大戸間邊ノ廟　大和国坐
国津社宮　面足ノ廟　大和国坐
素曽社宮　惶根廟　和泉国坐
御熊野宮　伊弉諾ノ廟　紀伊国坐
白山宮　伊弉冊ノ廟　和賀国坐
日五十鈴宮　日神ノ廟　伊勢国坐
国上部宮　天稚彦廟　但馬国坐
栗崎ノ宮　彦火火出見ノ廟　大和国坐

隋武ノ宮　下照姫宮　肥前国在
住吉ノ宮　彦波瀲尊　摂津国在
石田宮　手力雄尊　但馬国在
春日宮　天児屋根尊　大和国在
笋田謌　十二額ノ事別紙在之
素盞嗚尊十二韻ノ事アリいろは文字声定て
稲田姫ニ傳へ給ふを稲田姫より代々傳
来りて照太神出相傳まして人麿之傳し
我朝之上古乃事を書て恋之事まて九のよりこと

一　日本国を八嶋と云事
一淡路国　二日向国　三阿波国　四大和国
五隠岐国　六佐渡国　七土佐国　八紀伊国
并五　日本国是
此国を日本国と名付し事真言ニ有てる
おこ給ふ大日經云毘盧遮那者別名足除
闇遍照之義也ト又大丸心ニ近乃乃日ハ四州ハ闇
をてらし給ふし毘盧舎那仏者をはてらし給は大日乃日ハ
十方法界を照しくもらさんきれ故ニ大日本

東を名付たり　青ハさなから也　さて往
給ふ時佛法流布乃地ならん給ふ時天竺
東北乃角より來て海のおもてにうかみく
見えけれハ二神此ミしるしくれの上ならん給ふ
海の上ニハ大日乃印文あり　是を佛法流布
のしるしとして見給て　此海の浮橋より
しるしとて此獨鈷（ドツコ）をおろしくうかりとうき
さくり給ふに大海の底に芦ハ根乃ことくなる
物あり　是を見給ひて我國を葦原國と名付給ふ

日本ハ獨鈷乃形なり　時の是國物を
まりて嶋と成　今のあはち山是なり　是又
大なる淡路のまり八嶋と云て八嶋と成なり

一　大隅國霧嶋山　　二　大和國御嶽（タケ）
紀伊國雲取（クモトリ）山　　伊豫國石鎚（イスヽ）山
伯耆國大山（セン）　　駿河國富士（フジ）山
加賀國白山（シラヤマ）　　甲斐國白根（シラネ）嶽（タケ）
是は八嶋と申なり
其外八十淡にまりて嶋と成　是を大嶋と

名付ニこそ二神天下て日本出現用て大日如来の
示文のと前ハ日本国と名付二神共ニ夫婦
しく一女三男を生まして出生ありし蔵給ふ
是を第六天の魔王は此国を見て定おは佛
法流布出来へしと思ひくてありて此国を
折伏之しと云ひまて照太神魔王に佛
前こ女人の為ニ妹海(イモトワタツミ)童の神乃媛とて形よ
見ましくいる此魔王にわたく毎との国
定くるとも全佛法流布出来へのうてしと申

法之ハ广生まる河みの神姫よ人ぞ守りて
日本国此天照大神にてまり譲状をわらふ
是ハ神霊と云脂荒男ノ八幡よわたらせて
八人乃八乙女金剛界五智にうつさとかうて人
此神ハ男ハ法ハ人祝ふ申ニ云ての广生ハ総
来を恐く佛法ハ正へ毎ま本心に少下し佛
法を奉く見て
第六ハ郭ニハ十煙ノ名を出す
一ニ郭ニハ名付る中足すニ万有一ニハ郭ニハ云

てけふよりあるきみちと演之足四五月まてまゐりて
農業を催して夜に明生七億乃甲乃食生とも
よきこれなく又けるを先生日郎云虫の生之書
呂郎云と云蜀玉治生にて浅あらそひて軍
に打まけて遠生へおちゆく旧里の所を忘
く死ありし甕郎云と旅なし今更不帰して候之
とぞ云二郎公をは何ゐるとしてけるおちゆき来る
へき河沙郷して四五月にて来る者之三世常なる
とありて死てゆ山にすゝむ年有れ夜生乃来る

を語りけるに世常にいひゆくもゆる者之世中
十王経を喜こふ心なりし四こ童子けるさとさとて
いさゝハ深山の末にいろいろ住なれうし庭の毛
みある落て小童れのこそりふるある様之万葉に云
志その山中にくやさつらうなくこゝろうち者を読
かこそ五日の山伏の五に洪る先生よハ仁何を
作てうりけるに翁をはちるおきのりていくとい
秋あるをにるにありて九百歳るに背をと云
たり夜よりもてハけるを来る時に本乃生して行

のやまうくれる郭公なくはさくはいりまでとく
しと云也是も万葉ニ云ほとゝきす鳴ける夜まて
ふ鳥ハくるしさを忍ひて行ける事六ニ子細
有とハ此鳥ハかくて鶯（ヲウ）ノ巣（ス）ニ数をかへ故ニ鶯そたつる
ものハ鶯の巣ニて子を生ける是ハ万葉ニ云 鶯の
かひこの中乃郭公ひとりなして父に似てなかす母に似て
なかす 七ニ 土田田長（テンタンシナ）と名付たる農業を催さん（田子ノ田ノアルシナリ）
為ニ出る故ニ此鳥来て作田（サ）佃（テン）作る時なれハ鼓と鳴なり
里田作くしてハしく作る時ハさかりと鳴ねまといふのなるなり

此之万葉ニ云ひとりの因縁にてしたる世て
きにあそこの国物をとわさる事しよふ 八ニ 三月
巣（ス）子（コ）鳥の冬ごきる山へあり 九ニ 若帰（リキラン）鳥是
くあむきは日右更て若津くあそこるすハ
生かて来とらしてる故なる文選乃注がんし出る是

口傳秘密ニ云

昔大国ニ瓊（ケイ）と云者有りかれニ蘇子（エウシ）伯陽（カツヤリ）とて
二人有り蘇子ハ男伯陽ハ妻也 蘇子十七歳 伯陽
十二乃としより夫婦と成てありけるか廿二人

の者有けれハいきさる事二ド(?)佗本けるくまの
妙玉は高き木にのぼり光を待西ようさうけ
ハ里に行く光浅送きりうつし桂子百余
伯陽百年いろの面うきうる時伯陽死しける
ハ男あおうちにすみけさう為し公死れにき伯陽
うつにかへしてまゐる之ら我ホ合きしかく八
月十又夜乃しく月乃明るさなる月をまは
九を事てある之とふらく秋月のかハ秋てあハ
久れハ桂子なり我あるさかくしくして秋ハ季也

あか作西へ我ゆめ之と之人ハさきしハ飲食とる
て命をとてかハ我ハ心して助之と云也彼如(カクノコトク)し
く天ト生る桂子ハ牽牛と顕し男女の契代
給ふ之道祖神とはさいの神之伯陽ハ織女こ
母をも川ルのうさ後く宝殿(ホウヒン)に入て宝(タカラ)にふ
奴作七月七日ハうちにあいなるハ天ル帝釈
らし一切衆生に川る之法ふ衆ホ果ハ生に給
くはののを亡きうしかそもうし法はざるに七年
去ハての帝釈菩薩堂に入て衆生の業報

ひと勘人毎まふ日頃あくしてあ卿くさされ
棚機(タナハタ)あハ猶しくさくれり
著八　八月十五夜之光於事
秋ハ月の名残はる時に通てもこよなし
八月十五夜の月ハ秋の気中よそ光さやか
なきあハての帝時請えて人の道をいさめんとて
八月十五夜に頗梨(ハリ)七宝樹とハ末中にて
あそび世種に梅檀(センダン)とハ末ハ時初て生じて
けれ秋月請天光と称し(カンヤカ)地すハ梅檀(センタン)旬とらへを

秋夜ニハ地たえ光曜(クワウエウ)して月の光ことに冴渡
　　定家卿
明ハまた秋のなかハも過ぬへし傾く月のをしきのミかハ
第九　とまを通音此事中秋に表証せらされ
ともに実業まされしを絡し頂王府のおと
日本にも山陰なしやうもしとを紫宸さて生さら
それハ明道見知られて二十九日にて信在の
社にさし起て御詫室御開帳御帳慕まそ
山吹の花ハ気ぬにけはとかさも古のとれとまれ不思

足よりしやうまかくにはあきもまきし（まれなる）後復者
うまれて寄ことしすハ佳人の聖のかかれ
宮を恋まりてく昇ゝしてし治時に八方（ヤワ）
代稚廷行川より路頭にて此神とさへかまら
むる大唐ノ五イ川くいふ生まり今乃まを
まもるをおくすみよし岸（きし）ま一夜まり
へ治しハ明神恋ひまた抜て見ゐなそ渡り
治ふ成すり
第十 堀川十二名事

一 埒河 二 埋川（ウヅミ） 三 玉造河 四 思深河 五 白川
六 面川 七 芳川 八 君川 九 陶河（トヒ） 十 名も川
十一 流川 十二 面影河

一
一 物之名三箇之大事
物名ノ巻ニハ十首を秘としてしけし深き三乃名
をハ大事とし 第一 唐玉木（シカタンキ） 大略本抄ニ日讀
但し此十ケ中ニ乃せられて[?]海の木
思出と志やうとすゑからまへしまつハ来
宮殿生れ産ノはハ梅のまこて先柳かさ之橘ま

てえありねやし居ハ三すぢありて冨にもちる上ハ
王乃字を云らしきハ国と云字を云付て海とも
ふりをさせ陰て陽ハ陰陽乃かゝ陰て王字ノ
生氣ノ方ニ向きし処ハ人ニ志らせずして場ノ
思ところ也故に是也の末を付也

第二かとのきそく花と云事

先ゝつハ蓍（メト）草を云或ハ蓍草ノ成りと書ニ
小花をもりもしあるとあしとふきそく花と
云之文義ニ云かとくハ毬（ジン）ノ名ナリ唐毬子（トウヒンシ）をまく

饒しるしゆるく口ハ国之まくり入腹ハ心字
あるかあ之花立之為ニ和相につき遣り異国趣之
足はかさと云よの津ゟにおけ枝ハ人志られ
花ハさうのかハ柳桜をさしあ紀付ハけ川里
花様さ流あり

第三かハれ古哉事

常ニハ河のかをそ水の甲あり石ニ生しゝ
川苔しるくあり今ノ義ハ馬ノ名ナリ河や満
小川ニあれとそ行りかなの事ノ字ニ略しく川

あるさしと云なり和歌の物名とも家々にハ何な
りとハ秘し給事也古今にハ思をとらし
世をさとるへき事也万葉にハやさしきはつくし
思さはわかつに

一 和歌 三鳥とハ
よぶこ鳥 いなおほせ鳥 ももちとりなり
第一 呼子鳥 本抄にハおほくの説とのせたるの
中に猿と云説ハよくあたりぬ但猿ハ異字
まよふる時を文林の抄に今ハ寺院中猿なりといふ

なと云々 猿ハ三アリ 木の葉猿とて ちいさき猿
の打より宮消の末にとそひて鳴て
秋食するの時人よくよふこ鳥と云なり 赤
実にハたゝこ鳥とて 胃乃猶河鳥わ来るく時
鳴と云 此鳥をたとへくしと傳云人ともあり云なり
売此事まこ寺のわか葉やまらのいはきとて法さ
山より入道をましてはふるやいらふいかれとも
ふあり
第二 いなおほせ鳥

本抄ニ委註セリ其ハ冥の事をかの世にて百喉ニハ
稲負鳥と云なり仍テ秋稲負テ我歌ニハ
こふるをいふとなれ尾し
第三　志なかる鳥とハ
猪名をいふなりさもしるも古今よハ志なかる名書
ハ人あり仁王第一ノ帝神武天皇延喜御門ハ地の
子出来ましくもされハ御足れうしにはを
のあるくしうしてかうしくもされハ足とうくさ
むとそうかれとひのを長くさうちもされ

志なかる鳥とぞ云なり

一　作者　三種口傳之事

古今集選者紀友則と読人不知とうさみて撰家
と申かくハ延喜と紀貫之序武ハ辰乃御事之読
人不知と云ハちうくら之代人乃ゆう之撰不知と
書ハやしき人なる之

一　五種之人麿之事

第一ニハ石見国家名と云者後(ウシロ)ノ苑(ソノ)柿(カキ)本ニ年
於後花四五年乃若冠(シヤククワン)アリ其名誰人そととは

父もなく母もなく又親類もなし　須処もなく
きハまり雅しといへどもこゝろざし深く行
すゑる読書能くするにより人ハ吾乃道をこしらせ
しめとて作りゆくことをふかくしれは當國の守目右
くがやうなるものしかるゆへにこゝろざしいな
ましにうつて見しても帰りて御門に奏
も持統天皇乃御門入唐あるべきよし讀し給　もは
忌代乃久しくつゞき老中ハ都にそうて　伯者の松
御門御感ありて姓名を右衛門ハ吉備と給ふ

其後ハ家名を橘本より出来しハ橘本人麿卿き
姉ハ右見乃権守に任じ後に右京大夫正位下行よ
かされ次の年左大弁大夫ノ権頭正三位として
天平勝宝元年四月二日遣唐使とさだむ又
同九月帰朝して參り
第二　定家（チヤウケ）ニ云人丸ハ孝昭天皇十一代後胤（コウイン）なり　参議ニ云
第三　重義ニ云人丸赤人ハ一人なり平安ハ人麿
文武天皇乃后橘ノ大臣ノ我母をおろし　出す
しかりしてきゝて是人せらるまにして總出家の

那よりてこそ遣て〻月城治して侍るに聖武
天皇の御時左大臣諸兄（モロエ）中納言家持等万
葉集撰人麿城召帰て哥の判者にせられ
させ給ひされしかハ左大臣藤原永手流人を
召帰て哥の判者にせさせ給ふこと、いふ是之
ことかせし時諸兄公て中大唐ノ白楽天憲（ケン）
宗（ソウ）乃后とおもしけるまく元和年中に潯（シン）
陽（ヤウ）江（コウ）にうつされしかとも文道（ブンドウ）の宗匠なり
によりて文宗皇帝の之を召返しけし

春宮乃学士（カクシ）とし給ひしかハ申しけれハ
賦義志かる面してそれし是をきゝ賢
聖あ里

古今和歌集潅頂口傳下

さる程に人麿姓のけしきよく赤人とも
申足にしりし人丸赤人ハ上下まきまへ給
評仙なれバこそ古今集に人丸が哥ハ
いまだあり赤人の歌一首も見えず同仁なる
難け人あり

才口　菱乃人麿之事

白河院治天下時雲甫内大臣源中納言兼隆
の息雲岡ノ讃岐守兼房といふ人年比和哥

にしんの入て哥を讀給しかとおもハれしき
哥を見讀けれども人麿の念してこそさしもの
祈請此おもき比夏よ比叡山西坂本と
おほしき所へゆきにけれバ余乃木ハなくて
楊の花ぢりさくが白ふ識に目出様（メテタキサマ）に見えし楽
きたりし老人西要に薦文のうへにぬぎさしける
のしたの禮をきしあへるさまにて此尾にて嗚
くだりにも紙のもとに帯乃人にて似ぬ
物の業しける様之兼房りさましてそ歌人

其後同様六年来人丸御かたちわけて見給
へるさましあかきしよりて見えまゐりけり
かゝりしくさけにしくうせぬ夢覚て
絵師御請して夢見しまゝかゝせ給
し日来て御前にかしこまりて給へり
御本として秘蔵してつけまいらせ給ひ
志ふかしやさ記しけるの道輔寿けり
て死(シニ)ける時その比御本白河院に見せ奉
まゐらせ給ひのちは院よりこそ世に給ひて寄持

其後宝蔵に納給しを六条修理大夫顕季卿懇
こひまうし此事御書うつし敦光(アツミツ)に賛を
作らせて六条にて大臣顕房長顕仲小
清書させ給ひて此人丸ハ稀なる花をりても
君へていはれては讃御書多り
其丸ニ権者之人麿之事
傳教大師住吉ハ新羅明神とせ給ふ時ハ大日
の化身にてましまし人ハ文殊とこそましまし人丸ハ観音
ト云ニハ此異説多之にて以て當家ニハ妙

天竺乃仏成ハ在之唐土にてハ西天(サイテン)菩薩(ボサツ)日本にて
ハ天照太神と顕れ百王をまもり給ふの
明神と云ひしてハ武勇神としても異(イ)国乃
夷(エビス)をふせきしを人麿と号してハ我国和哥を
興して和哥の道をひろめ給ひて世ゝに至
平城天皇人丸の才ハ歌をよくして淫(イン)乱(ラン)の
殿小納言ありし業平新帝の御前御位
永ハ九にハ天臣(エイ)ロウ(ロウ)サイ右三人丸ともをまもり給
古乃神を兎老祭之給ふ伊勢乃神宮七瀬の

水までも御頂上そくく伊勢大神宮給若松尾八
幡比叡山山門数多の人丸乃神ハ供具(クグ)を備
へ奉りしの事かしハ七ヶ若ハ三七ヶ乃至(ナイシ)百日流し
先ハ五徳を授つけ玉ひしとなり

一 業平中将之事

業平ハ桓武天皇第四王子阿保親王
を父とし　同御門御女ハ伊豆(イツ)内親王を母
として淳和天皇天長二年四月一日奈良の
京におゐて生まれ給ふ其ハ三百前に母の胎内に

曼陀羅花ト河曼陀羅花等ノ四種の花ふ
り四方へちり胎内より光をはなち光乃中に
圓満乃二字と云文釈迦多寶ノ二佛並座して
阿字本不生乃理を説法すと云父乃親王夢中
語之ハ我ハ君乃胎内より二九日出家しを京
甲乃先様上下是を語て見るに昔語の
きよらハ此年十五歳にしと云物に記す五歳ニ納
語てり仍誕生之後真言上乗乃義ありとて
曼陀羅丸と云二十一乃年貞観寺本主弘法

大師乃御弟子真雅僧正ノ禅室に入て是を学同
生仁明天皇承和八年正月十七日灌頂ニ元服
して左近衛中将に任す貞元二年九六にし
毎夜守心にて是が治同二年小野小町の使を
涙ふく左近中将に嫁せて浄折大将乃人ハ兵
枝を射人君をさる夜業平去れく乃后宮
しまうしありり承和九年仁明七年文徳八
清和十八年陽成四年五代の帝につく
く元慶四年五月九八ヶ歳五十六にして

死給しハ大和國布留郡在原寺なり

一 猿丸大夫之事

此人ハ山王乃神官也山王に猿を志しやとし
給故ニ猿丸大夫とて云之允恭天皇之後源
たた大夫継家卜云く今ハ云此人ハ何国之人なり
性ハ弓削之猿法丁皇乃御時大衆とて叡慮勝
法と行ゐ女乃方に思量なく石れなら法
皇も從まく思ハ猿丸大夫とする八猿ハ人ニ似テ
人ニかりしは此人とは皇もまく御身ハ無達

人ニ仮をまてもの事しき人ゆへくらべくてハ人
にあらずとて又猿ハ山を自在ニはしり猿ニ肉裏
又ハ大内山と名付ら内裏に居いせひと称るし
しなとされも其ほとの人を返し名ら替る之

一 古今之謌乃数之事

新合千百首但目録乃ことく八千九十九首
読人不知哥ハ四百五十四首但三十一首謎おこれ
返哥十六首 神楽哥七首 催馬楽哥 十四首
俳諧物 雑哥五十首 雑躰之和歌二百七十七首

三十六人撰(センカ)哥十九首大和物語哥十四首
寛平菊合哥五首朱雀院女郎花合八首
惟貞親王哥合哥五首
亭子院哥合哥 二首
都テ六古今乃序には千哥廿巻(チウタハタマキ)としるしても
今あらハ一千九十九首と云 蓋て云書之カ
延喜五年四月十八日に奏しひて御門にこれ
御なりまけしく千首あり去りても御門
為いる人あるて是之中哥ハあらしく紀付同に首

元見てぬえし給ハれハ我撰してまいらせ
給ハ帰らく入さらし沙中の歌ハ撰者乃哥
我の今さる世合あらし給されハ百首読も
年後御門ハいる思合ゑ平少人九十九首と今世
給のく一首と許させ給けり されとも村上
天皇ノ御付綿(ヨミ)子(キテ)給ヌ又二百二十四首と撰
テ同古今集に入給し故ニ歌隆ノ本八郎
連乃本文ともハ千三百九三首のとし摘傳
ある所ハ洪円七十二首あり 只傳アリ

一口傳之事

百千鳥之説ありといふ事此事にいはく諸鳥と
いふ鳥ハいつれの鳥ともなし鶯トいふ傳に云
鶯ハ百千鳥の身一なり別て鶯御かけもちる鳥
といふはあらたにしたる説なり四の眉の梅の実
なりかし百千鳥ちとらはれて思ふにさまさまに
一切の小鳥選はれて候ふものこそ皆鶯と云なり

一 五月まつ花たちはなの香の事

花橘ハ昔の人の袖の香をしのふむすれは

むかしの花也とし 漢書ト云文ニ云 湘雨
湘潤興芳七尺廬橘偃傳於台袖頭髄脉貫
藺蘿二丈之薄花彼速於後心 首大国ニ曲丈
興芳とて二人ありし曲丈ハ男興芳ハ妻なり久く
契りしありしいかにもなきにしかるへきなり
興芳病にて死にけりしかれは曲丈いかなりち
不覩之其つゐにけりて夜書覩のうち真興芳
墳の中より七尺の橘生出て花咲いかなる
事てありけるにより昔の書の事なし

かたはらにハまことにハ曲丈カタチミトウレイ
はまりてかりて唐りを作りもちて露おく
の雛とさりし故ニ橋と唐橋し名付けし
くは此花と見るさしに曲丈間給ふなりしく
されハ渡此夏御く閏曲丈奥芽七尺の
唐橋と名付られ古袖御傳しにハ肯此奥
芽の袖の香りめくる故なり頭髄（トウズイ）すち
ほしぬくしハ菖蒲（エミヒヤツ）と云者花ぐらし頭（カシラ）乃
元ゟりすさ一尺半生出し二丈まてしかく

して風の吹ひしくれハ花の香ならてゟ
菖蒲ゟ袖まつくまくりし給ふ袖にほひし
なるなり此夏ニすゝき乃花御人の袖まそ
まねくしとてあらハ此花ゟ菖蒲ハ男なり
花橘を肯の人乃袖まる香まハうふし付文
ふまむなり
一 此ころの菖なりしろいろのすゝの香乃ゟ
付六の相対は法京しいかよし子細ありけるまゝ人を
天平院の大臣時平乃法親安京都へ出思ふと

ゆへなり延喜の后りあらせ給ひしより
しばし寛平法皇よりこそ給ひしか化事なく
円融より初のありさまに見えたる迄給はさりし
あり年の書の本に河原院の眺望見給之
ともに文御息所よりさまにいて世給ひ二三日
遍照ばかりし時余の御息所のそのまゝとのそ
こまりて夜法性の夜の花いひし然てこそ
咲きよし枝の文ともならの付より法皇御
星の時のおくれ給ひ延の平のあさまを

こまり此時は時の中の花としては見え
法皇は吉をも御覧じまして松の色とし里
秋之子見給ひのくまゐらせしく内息所の家にま
しまさせ給ふも其時は二条の后の御かたへ也し
て法皇之筆しせらるも毎年のまへにも面の
をかしき事何りあるをやしなう人のかの御門
から給ふ之清書は梶原は常の様風よみ
けれは法皇の御むかふの御まいをしく世給ふ
ところ之文后を嵯峨（ミコウキリ）天皇より給ひ給ふれ

とさまにまうくく清見の御なみのかゝる杜
風ありあまる人のまうしゝを世継にも見えたり
一　飛鳥川渕ハ瀬となり有乃家之事
此飛鳥川ハ古今の読人あまたかくしハ
文徳天皇乃御時二条の后の小御閑院の
たゞ其まゝ一人の家に飛鳥乃君と云女ノ
里母ハ大弁平の權平ノ我母之彼有ける義
人有けるハ文徳天皇思召まして也せ
みしかりし御門ましましにありしせ給ひハ

中将藤原義平の作りし權藤のあそん
まうく結契(ニニウケイ)の繁御せう皆々わりもちうき
のは日数つゞきまとはし思ひにくゝ權藤門水鏡
こく月被有とそちもいつ板よりたる言付
又御闡會ゝく表中之倉きわかい汁香你
それをもとめありけり権門よ飛鳥川に母す
是をよつまおほ之大和飛鳥川別節なり
一　古今和歌集灌頂口傳
本乃〳〵と明石の浦の哥之事

此方も文武てんには、おこたりなく讀經したまひも
いふ文高市乃王子にあらくれてとも、ふかうあるま
文武備れんあるへし
ほのくしとは、おもふかるあり。能くゝしくは、舞
ハ輪と底に法の輪之無二乃滿とは舞をいふま
むなしき之滿つくもしとは、此滿は法輪の滿とはい
ありて凡人のうれ苦、生老病死乃四苦ヲ四魔と
云之人乃死をは、此生老病死乃四苦におこさ
まよく死ぬまては魔と云ふて舞とし、それおも

狗とは此子は常の舞とはかはり、御門とまし之
王の舞とて舞なく、そまりまゆ常のこゝろさわは
十善乃御門も此四魔におこさまてく死し
給といふ人し、そのまゆとしは、をすふに讀經す
凡六義といへ共は、奇六くわあるかわは舞一首に
あるへからは法ふまとてゆ今凡所は六義しまを
とかへてより舞乃夜はおゐては無名凡滿の氣
色をもみてて、文武はく備れんとありて
讀經するはは風乃いんく十善乃御門もま常

ともねつゝ連歌のくわゐいとやさしき事ぞと
のたまひけりしかれば此ほとして連歌さるゝは
賢人の歌の流に朝霧と云ハ時の霧とも云ハ又ハ
御門御朝といふは什方乃御さり御門を奉
りとて連歌さるゝは典のらく賢王聖代なれ
は御門もてあそひ給ふは生死をかへさわぐ給ふことく
ちかく連歌さるゝは雅音之高位乃いとしきれなる
花しき物ハ緋咲なるへく連歌さるゝは頑(ヤラ)洋(ヨウク)く
としく耳にきこえしはすく頑(ヤら)の音之悲しは

一首の六義を連歌にすることは其の音をまね
ぶへうらむ

一思ひおもふ花の山乃寄之事
おもひいつることはいふにもたえし花への
山をつくするは什方の御ハ大納言国経の
の小方ハ左原の業平の源(ミウ)棟(ヤナ)梁乃出頭家
てするとを本院の大臣居ふとりまて濱給
ふとしヘ又ハ業平の貞文と云人乃小方ハ傍
流ることく天下の色好ハ御時年にさきま

亭殿さまくしくすさしけれは時平ノ時
水院へ出仕し給ひし時雅君の歳よ
なりけるか西乃發りありく程けるを母きゝ給ふせよ
ともうらいかなり書付つかはし給ふ哥
背せし我のこゝろに云えのあしきいふ物おもはしきわかるゝ

返哥

うつゝまてもの思ふ人そ思ふ事になきなくありけり わかるゝは

此哥二首なりし後撰集にのせたり

一 伊勢物語乃作者之沙汰之事

或人のいはく ひとつにいへる伊勢物語は
業平の東へ下りしたくひに書なしまてにて実
はいくさきさかり其後は業平二条の后に和
よひ給ふ事の露て御勘事ありて奥国
業原の郡へありまてきゝくまてと后ある
くすり給ひせ給ふもこゝは后せしと太政大臣基
経ノ関白めく行す日天下ノ事給はる
らひ給ひありて東へ下給ふかめく行ひ霜の衆
はりまつりは押領まなくくさ三位まてくわ

あるし時二条の后と婚まして密かよひのありし
人のるさをもゆるしくわれまうり書集漢
家本朝乃書光御門上まいくてらしとまい
而の名りよせくられてゆく御伊勢物語と
名之今も東の方へくくまかりて友とする人へ
ひとりふたりしてゆけるハ紀有常一人ハ太長淸
依平貞文なり此二人も業平と越しま友の友
ともろくしく合たる事なきハ同勅勘ならく
其外へなりまかりし友日友とする人しと云

三河国八橋とハ三河国ハ三の河三川ハ三
水なりあふみハ目録あし其まろくく取
しを書き我見せまして前に御足をもて前く
人をとみまハ恋しく宮御みわし都しく家をな
ませハ三の水ハ三ツなり三れ心ハ二条乃后の名
こそりゆるれ人御恋しく思ハ深衣乃后四条の
后をも見恋まりし名のつ同しく人を恋ふらす
むハ名しきんあり若といふ之しく三河国とて
よりゆくにもゆへも八橋といふてしみ

と申すそれハそれ〳〵八人是を八方にわかちて
にあてゝ八方の通とハ
一にハ三条町　二にハ有常女　三にハ侍従　四にハ小野小町
五にハ物書女の一人　六にハ貞文女　七にハ當純女　八にハ深尼
内侍なり　本のけしきあり居とハ基経の寵
りまして时とそうけしハ流うけ之　さまとハ母
きのひさ人之王澤と云在中門守紀有常女
て門前市をなせしくまゝさつゝ人あり昭宣公
花園白あるくまりしくあまり　そハおろしくあのくまゝ

ひしあり　杜若の句の物主く斉債
と花山乃僧正遍照妻くすかし人わかる
きりしあさもかしの文乃事ゝ〳〵あしハ后
新りてゆきをつゝ取りしあや　唐錦とハ
題之葉平二条乃后と忠ちまて讃しあまゝ
あとハ義あわかしも唐人まで帰りし給そ
おる时そ小車乃あり乃つききる錦の糸を
親乃ねかるとてまいらするあり小車乃錦のゆゝ
をこめとこして以下ハ一家意人のまゝ人

さま〳〵今のやう二条乃飛鳥井と鍵り始しこと
世に傳りき　書しは二条派の御手よ之

一　武蔵守殿御流の中よ行はるすなはち
のちよ是をまなびし高風(?)つかうまつり侍
御家園よりあまた了　長友は清水で貞宗（テイカウ）
十八年十二月よ御位きこし世尊寺行子高廣
位より生給て東山慈照院と以下川へ引年
之可通達せさせ給ひ御書別り二条の后
乃御せらしと明宣卿を何ハ武家よそむしと

法文觀大納言慈鎮ハ御籠事よくましくまさうその
慈（スケノ）照河乃御さて中書に何給ひとまする能
すまりしと云之ら給ひあまた東山殿へ
と東山よは都をはなれまして勢つかうり東之と
通ハさりけるも照宮といふあまた禅門と節
云茂主ハ不望百度御納冥海とさる
し給ふ殿にゐまして有ますよし貞觀
政要ト云文に其ハ武母臣ハ武家の能載
毎少の能（ミダリ）猥無ニ公之侍臣守ニ天朝ニ如
二

陵王守備守舞ッ要文三公トハ太政大臣
内大臣ハ三公君ニ准ヘてあるき守り奉る
手治しちれあとりやてし日ノ本ぐねんと
清和て見らくれすませ給ふなどなり帝王御目ニ
角くく奉る文集まなり帝月峯ハ鬢久しハ
万倶閣深し文帝をも日かし奉る夜常
裏を雲のどていのわりし御月卿ト雲客
トなる之まきハ日も暮ねきハ隠さりあふに察と
ハ御勤も気めく清和て見らくもすませ給のく英

御子陽成院の御代ニそへつゝ在して勅ニ
勤と気乃いへてあるへくこその心思ぬあふと云なり
給人の物らくとは文の御門すなる之白き多
のたりしと是して帝か河へまゐりそふとハ陽成
院其時自き給ふとあらく紅の御御講をと云給
ひたりしを以て京まゐへね多くハ葉年の京
りけりし付ハ仕君いまだ位り清せ給ハさ
りししといふ是を勅多といふ多かりき多まいハ
あるハ一て四海御ららまるにつきそして

日本ハもろこし之人都をとらうと思ふと云
名かハおいしき事とりし人都を為ちおはしへけるや
あしやし名かハおかしく都と云名を付るは
都のことを定る知らずしてかくれなかりしかあるそ
是てあるくハ陽成院なり実ハ業平也字
なりきらハ業平乃事をさとしかしてウナレテなかせ給ふ
一 伊勢斎宮よりの使の事ハ十首の秘之事
都より大くよかし日のつとめに狩のうちすき
けんの是ハ業平の斎なり京ハ二条の后

あいそりくやうしまに人をもつてのかりしと云ふ
ころなり 思ひを定めて狩の使は帝まへし
ときに狩山の使みせさせたは是を斎宮は申
なり斎宮よりハもてなし物をかくハ迷ま
おくりさに業平にあひあるへきみへしまと
いふころなり
名をきこえさせなる狩山かんしらしと狩の使官人さらさ
斎宮とよひいるをもてなし業平中あはいる経
の事ハあしくて濁り

又よみ定家卿ハ思ふ代々二条家すなはち川の水
堀川の水ハ実朝卿を通へ給ひて内裏に
てなかのちかひけるを流しつる事なり
されば定家二条家すむしと濃ハ業平に承て
一家あひ続けり今二条家とハ申しても絶えた
いかなる儀ハ続かず御家の御代々申すやすきこと
業平卿への御りし時東宮の御位にてなさせ給ふ
み続けりまさて京すらしと聞しければ
思ひのこしくそありしりとえる時にんやまなるもの

と濃侍り
楓技の国の梅村枝をそて月とかりしこそ青侍れ
業平にあひて侍りけるをとこに嫁せそう
さ被つかり青さらいて梅とよみ侍へり
木乃本にしおきけるを見てよめる歌ハ楓その歌の
是ハ業平京にのおりて東宮よりの御使（御見舞の）
しも元生しかくしるよめる
ゐなかなるおさふいろくそさまさして我まかりてよいなるの（つりね）
業平卿へのおもしろて大淀（淀）此をのかよ三度

をきまり春宮のるとこみゆるくあるそまき
より秋宮へは九里町なりつまりね
一 秋宮乃御腹に業の御子ありつまりしたれハ
まへの御嫁給て坂三位高階藤花子ありき
ありしく三年をとつれは女業高高階ノ御前
是ハ人と乃高ク人ハ是ハく
一 暁乃あちのあしきは百歳ありき乃命ある事
口伝云 兆殿ト云文云 天竺の刑相大王ノ后の
是は五百一番の義人ありし海にその国

に術頭御とらく夢うるあけりて天竺乃将軍く
物ある時ハ東寅をすてけりには女御の御身をせ
給ふをてこまけはりくらう将く術頭安保御事
をうらしく刑月大王ハ后御覧ありて中へく
底とあらく命ハやかく刀くしらハ付くとを
大王こきしかしく后の宮御を付まして
情ハ人の為にありけれハあまらいくまりうたて一度
あひ給へし すて光殿へは様あらく物家ありて
らしをつけ給へは宮とうあひしよ夜もとれハち

くおらがすして喜見城しと后のまちゝる
大象の車に乗志ちをたちのさに錦の志
とらをしきれ九敷の灯をかけさせて生
雲見そ帳に候けり術婆伽を見しく御戴ま
んをしめくらけ志ちの上は百度の上の内
をせよこの内に一度まであるまじい給ひ
久術婆伽いたう有くこれはくくく車乃
志ちのこま百度のまゐねとしけるにけり
と夜りや后おりしまほしく東海ている

やまく神を詣りしてなむいたのねの
年すをも付くいそりくまけを頼にまをそり
百度になちけら夜は目まで法をまゐらく
術婆伽り后百度みちまい珠をせすのかさ
しまさえまえとさしちさみ風写をあし
こ須まゐらの皆をとひさをりしく十余
人百くし後喜見城へ行術婆伽く術婆伽
を見給ひまの前後も志くれ術婆へ人の后も
九象まささ幷の多ちとあらし法くと

とも果報におもひてよろこひあへりしハ
うれしさのあまりせられて打並の神なら志ちのさ
しまらき待させ給ひ女房の懐にくゝせしまし
て来る女房のうへ喜ひてつくしあへりちいさきさ人
の為乃出させ給ひてしもおもしろかりけるなり
御りとかそハしくみるりけるとみえて余りの
あまりしさま天下にあまねき地をかなしみて有さま
もとらもつかうれおもひの余りにしましまう
と出して其身を焼のことならいに書き音こ

思振て宮音屋也陽屋也障周屋也以上一百三
十六まてハ焼身り弥二云付句ハさる事なれ
とも暁の志ちのかしらき百東かきこまかの夫ね
庭にはわそかまこうくしゝ奇にすなりに
かり養云　天竺辰旦にハりしより奇にふ
事なれハ此くと日本の人付くしより句を
衛無物かんの下の句れんハ奇なる代心と濡る
らくつかなく――

一　我心なくさめかねつさらしなやをはすて山の奇之事

傳ニ云ク信州佐良志那郡(さらしなのこほり)ニ山あり其形如
をいたる山とも名付く彼山乃ふもとに安那ノ
義定といひけるものあり おさなかりし時より母を
亡くして伯母に養はれてありけるに是を母と称
しける男乃伴ひける妻志がらきの詞
物すれはひてカフリ山にゆきてすてけるとは
思ひもとの女か母の情をおもひしへ
作りけれとも死せしとしく月を
見てくはしとさけんとてなけきかくよみ

ハ死にけりといひけれはかるものひとり〳〵奇
君が佐山のあまたにつきたりとて峯のこゑ見えずなりぬらん
佐渡あるとて立の山まへ登るてたへ立まよひあれなん

古今和歌集灌頂口傳下

歌道之六儀

夫六義者

風(フウ ソヘ)　賦(フ カソヘ)　比(ヒ ナスラヘ)　興(チウ タトヘ)　雅(ガ タダコト)　頌(シヤウ イハイ)

哥乃様六ナリト云リ 紀足を六義トス 唐哥トハ
詩之事ナリ 詩より出たり六義とさしてするなり

一 そへ哥乃事風とそへ哥といふ事廣韻(カウイン)ニ云風ハ
諷也ト玉篇ニ云風ハ諷言ナリト云り是ハ何となくいひ
なしてそのものをいはすしてたとへたるものを事
寄てとんぼくくし讀る哥は事も付て意
風言風として二種有

意風哥といふは

難波津に咲やこの花冬籠りといふはさくや此花
所を云て意をこめてそのなとをさしていは
らはさるなり 諷(フウゲン) 仁徳天皇乃いまた王子に
て難波の宮に御座ていまた位をつき給は
さりし時治給ひ宇治稚郎子(ウヂワカイラツコ)とゆつりせ給ひしに
今ハ君の位につき給ふへき時なりと申すくに奉る
と讀る是ハ王仁梅によせて讀るんに
梅ハ百花に先て開るによりて立春を先不待
芳花従ッ開くる花也その頃ハ冬籠りの
して梅のさくましにしてまませは今ハ帝
位を開世の御付給ひて何かくしもあるへされ
はあのおりていひてもひとつに梅とのみ讀へきを

元意ハ佗息て皇をおもひしよみ奉るあり
又田原ノ天皇とハ天智天皇第七の王子
あり施基王子と申しまうハ後に位に流させ
給ひしれすてなしをとめひしうかハさりけるに
適に東宮に立給ひきまさハあまくへ此を絶る
宗そくもろ人のよのさひしのるくあら春
後撰集にのせられハ東宮とハ春の宮と云
ものハ春よあひまけるかして詠る又位に流
さかくまし海にも云春の雪きにほひ

乃ちかし紀如くと云けり 施る適ま春宮に立給
てれハ蔵あるものとはめるあり 彼に言風と云
人々ふもしとさへてもを詞少し易氏之布
西後れか寛平法皇の御内裏の女房か
おもひかけ給ふ所より奉りしを遊く歎よう
て或もりけるにふかくころあもりして
いさりれ光もをませハ
九重乃雲井よみゆる梅花おもてハ海さる白ひ
とよもり心いこてのつとのわ年之雲井しらぬ

裏をせハ女によせておもくハまことハ出こそせ
しけく家に入ておもしろきあり情をふくしハ
人のまことをうらみしこそ人之
二つの歌よみハ五篇に云賦ハ量之量ハ様之
あらはにそのことをありのまゝにいひくだしたるを云ふ
文集に云賦ハ命に李嶠伝に云此賦ハ歌に其親
人の事をよくえてよく付て総称風俗に二様あり
総称の歌ハしらぬハ
咲花の思ひはれく我れもあらそふ人のみはいてらさの
いまたいはまた

比歌ハ志賀の思ひ立る歌人家集ハ物に比して
立流くみしらのふるきをしらずいろはくろきをふ
物にあひ納失乃根之そわすれまことをしるを
花はおりしの時もおもしろきことをいひ出して歌
まいおもひの世と歌人は是を根と凄る之お
しらそ花をみつくしは愛迷とおもしちる時は根に
帰る故と心よするはさくを本とす常
須ひ花散もよ見法爾の理あるは愛執を
あつはひらくしらぬなるあり
はまたい

日本紀ニ推古天皇御悩とみえ沙門有誦
癪(イタツキ)悩卑朝(アサ)不御(ミツリコト)ニ階之云ろ さわハ頻悩と
いふ字をいろいろしとしるすもあり 或書ニ身れ
高申しを頻(ヒン)しとふのまうふをおもふに所
んやまりしさるを頻悩(ヒンナウ)とかくしたる沢ニ風俗と
いふ不成(不下云)ニ在牝(リウエウ)事を何おもふしるす也 紀
有常乃字
名ある散を同様桜花柘て世にもそしる 宗祇ハ
三句ほかへ行ハ五篇ニ云 類之方之上云り
うちまかせとさて上なり 比ニ上せ物乃之指比(ちひ)

アリあはせ物有ニ二言義し 全御之譬喩(タトヘ)ハ二言呈義とい
物を二つよせそへてよむ也 其歌ニ云
君ハけさ朝の霜おきていなは恋しきことに消や
是ハ起(ツクルト)をおもくとく又霜の朝に消るとよくし譬喩 中御門之
全御といふハあはせ物を重ねそへてよむ也 歌ニ云
桜ほとハ花乃よそなる吉野山見えすさくらの白雲
是ハ花与雲ヲ作別ニ以花為雲、全御之又持比(ちひ)ニ
有二両(リヤウ)顕比(ケンヒ)と偏顕比(ヘンケンヒ)之 両顕比(リヤウケンヒ)とて二乃言
をあはせてよむ也 けるつるはさこに持る指よよむ

なるなり　伴蛛奇事
桐のはしのかゝりのはいはまてすゝめせよ雅のち
是ハあるの名の葉に付物のかならへ
せらく思ひを雅のちりの目わたるすくに物る
義けり二つ毎にて物る心をまとの是を兩頭と
云之をするかし頭よいのうち云ひ聞へくあまさいは
每事しいふ之是にて金とも可嫌之頭は偏頭
比といふ一言にりきとおもしとの奇へ長奇に云
雅殿の美名をなとしいゆのなとさえてすみ枝の座用

亦乃音と月の光とは二つをとにはそまゐらすい
一すり友々偏比といふなり
四多とへ奇ま与字ともとへてとあきらかい
論語に云詩ハ可與ト云リ是ハ論語にも記けり
賦ある是付之譬ハ興賦與ノ二ツアリ数寄ハ奇云
秋意いとさもはさしりて海をもあの砂ハ濱風にも
人ハいふ意のつらなる枝ハつくつらにて風月の
海の真砂いよみつくせとはいふなりけりそ海
としハ一方紫とうきハ又古撰すハ多海と書なり

何事も多く義あり　比興其志を物によせてよむ
事之歌云
宮城野の萩の葉よりも露の枝おもりてふく秋の風は
又枝おもりて吹おもむくと云れは比興ある処秋の風をまつと
よめるは比興也
五に雅といふ　此雅の字をたゞしといふ　是は毛詩に
云　雅は正也　下と云り　玉篇に曰　たゞしきをもつてたゞすか
諸国の事をたゞしく　調をなし
て必読之

備の事をせぬ世をはゞかりてよめる歌也
凡雅に記雅意雅として二義あり　記雅は言
雅ノ歌ノ其詞をたゞしくよめる歌也　次に意雅
といふは心をたゞしくよめる歌也　後世の松を枝風
吹の声にたとへてよめる　奥津白浪
六頌　此字をいはひと読む　玉篇
に云　頌は誦之又讃祝なりとよめり　付之祝頌
讃頌ノ二義あり　祝頌ノ歌云
此殿はむべもとみけりさき草の三葉四葉に殿つくりせり

是ハ貫之カ所ナリ さき〳〵草ト云万葉ニハ三枝(ミツエダ)
草ト書ケリ 秋ノ花ヲ筆ニ書ト云ケリ 顕照カ義
ニハ三枝草ト云ハ秋ノ草ヲさき草ト云ト本草ニ見ヘタリ
秋ノ葉ハ葉廣ク長キハ観(クハン)ニ似セテ 山前ノ清輔カ
義ニハ去ノ花さき草トスレ之 春ハ花草ノ前
如キノ様ニ花ハ宮殿ヘシ 山前ノ始ハ殿ヲ
大内ナリ 今ハ以テ所ヲ定メル 皇居之さき草ノ
事ヲ称スノ義也 以テ正義ハ福(ヒキ)ナリ 草ト
家ハ実ノ草トハ 有リ 種ノ義ナリ 種ノ字也

云ハしと山前ノ別様ハしと云てさき〳〵と
読ム人ノ説ニ云 檜木ヲ云 檜木トス
檜ノ殿作リナリ 以テ日本紀ニハ 檜(キクサ)ヲ
明神トスル 事ヲ檜ノ字ヲさきくさと読ム
むかし時モ 或人云 甲斐国ニさき〳〵さ
の堂(トウ)ト云テ 神人有リ 其ノ祭ノ時(ホ)
修法ヲさきにし前ノ又幸草(さいはいくさ)ト云ル 桜木
といひ 是ハ甚長ハ華ノ字ヲ用ヒ 唐土
楊州ト云 世ニハ水濁(ニゴリ)テ 民ハ病ノ所ハ病(ヤム)ナリ

志ありて小枝末をも多く金に引すなり仍而の為
あはれ枝末は常に就きて幸の本とせり故に
幸ありしと云又湖に諷頌しいひし今日君とおもふ是之哥云
然るに春日の山にかゝる日は有る時なく照る世とこそ云ふ
凡此頌哥は有月定家卿安隆ノ歌部に挿しき
相論ありし定家ノ義には頌ノ哥と云は神明に祈る
詞なりし毛詩云美盛徳之形容以其成
功告於神明者也之二二義に云頌ノ二字は誦
へて徳広きをいはひて是とおもひし云

是を知る頌しは神明に祈る詞可惣之而今ノ
頌哥のいは此殿はむへもとみけりとしいへり
下一首ノ中にはすへて神に付る詞なり
新頌哥に詞をいれたるは拾集ニ哥ニ
春日野にワかなつみつゝ万代をいはふ心は神知らん
是も頌に哥なれと歌ひ是之か哥頌に
けふこそと云は安隆ノ義には今ハ下ノ春日野の
哥は非頌哥にて祝哥なり別ノ葉とも云く
君か代をなかくとさるみち技男之か哥は専

頭ノ斎人神明ノ詞あ(り)しと云ハ是也就神宮ニ
亦神社ニ雑言人謂而内侍所ハ天照太神乃御神
とうつせ給ふ御鏡なり温明殿ニ奉納し神宮也
あふぎ上て照太神百王之皇居を守り給ひ
て鎮ニ影向を見せ給ひつる又大小ノ神祇畫ニ
ましくて見え帝位代ニ留出し御まし
たる也ハ皇居列神殿之神宮則神社あ
まいた伏殿いもくへしとみをしと伝たる神明ニ
結う洞あ給へし其上日本記にさゝ

乃御神とい給ひて御あまとハ頭斎ト申
さるへしとあらハしかるへしと云

六義之大概也

抑仁徳天皇之御宇別書ニ書しと
是御而見はうく実是也とも也
難波津の斎とハ皇太應神天皇在
御子見守ましくて此御門位代御書乃
王子宇治稚ノ御子とかしに持つり給ひて
かりまさせ給へり実ニ此乃御子見給ひ

けるハ兄の御子難波津の王子にましゝを我
思て我位を継事あるへからすとて御位を
辞し給ひける兄の御子ハ又我兄なりしかハ父の
御門世を治へき器にしみそなはして末に位を
継せ給へり兄なりとても御位をうくへきに
あらすといひて互に譲あひ給へりさる程に御貢物を難波
へまいらすれハ宇治へまいれと宇治稚郎子ハ御門に
くまします宇治へ持てゆけハ是もうけ給ハす又
難波へ持ゆくまゝに難波津の王子へ奉るの

給ふ事かくのことく辞し給ふによりて海人の贄
を奉れともうけとり給はす猶しはしハ返しけれは
其のうちに魚なとも朽損しけれハ海人なきけるとかや
て三年まてかくのことくに位をゆつりあひ給
既にして宇治にて宇治稚郎子隠れ
うせて兄にすゝめさせ申兄の御子ハ位につき
給ひしをそ御弟をふかくなけかせ給ひて
難波津に咲やこの花冬こもりいまを春へと
さくやこの花と読て奉りけるより先にそ申しく

此哥のこゝろは梅花の冬ごもりの色に氣をそち
られて咲かねたれとも春の時節ふ来て咲
事ハ小君を大鷦鷯に譬へとも詠くまし
くつましくも宇治稚郎子と和くまさせ
給ひぬ今は難波津の皇子にて春宮
ましまし侮せとく御位につき給へとす
ゝめ奉る哥也此哥によりて御位に
つき給へりさまは同歌文哥まゐらせの
父母といへり此難波津の皇子とは大鷦鷯(おほさゝき)

御門とも申又は仁徳天皇とも申せり然れに
て申しゝ大鷦鷯の御門と申すは
ツクノ大臣と同日生れ給へりける
御帝此御産屋へはつくといふ鳥の大
臣此産屋へはさゝきといふ鳥入けれは
かはりをけるふしきさ同鷦鷯鳥うつくしく給ひ
しき鳥あやしとう思ひ申されて御子
の御産屋へ入たる鳥と大臣のうふやへ入たる鳥
をとりかへさせ給ひて大臣をはつくの

太后しやせしかば後には應顕(ユウケン)ははうを王子とい
大鷦鷯の王子の事也しかば国家をおさめしまゝ今
乃平野の大明神はわかの仁徳天皇ましてそ
まし海にしておや又王仁は本は新羅国之
人之神功皇后の国を征せられし時かば
わたりし物の石をわかりし中に使国乃ありしひえて
身をさんるりし此国にて要人と手一さ
に遂に王仁と云人は国の書一の事
らをしとて皇后にすゝむ仍て百済して

之よせ給ふやがて百済より博士を参らせ
たりけりことに臣下まで御門まで
御信仰あつく歌道は百済国の人なり
仍百済を博士と申すはこれなり

右此一冊雖為秘本達而依懇志令傳授之全不可有他見者也

延寶三乙卯年四月吉旦　當

平重慶殿

1272

元禄二己巳年十二月八日写畢

潤松

飯野吉右衛門廣芳

文化元子年正月三日

廣芳取ヲ傳受

山田吾吉丞